

タイトルが生まれ変わりました

16年間 なじんできた「銀河通信」のタイトルが今号から生まれ変わりました。

新しいタイトルはもと身近な自然を守りたいの願いが伝わるものにしたかったのです。

タイトルをデザインして下さったのは、アポイ岳ファンクラブの会員であり、アポイ岳ビジターセンターの解説員でもある住田真樹子さんです。森があり、小川があり、野鳥がすえおこしています。私の好きなカブクリや、密かにみずのシンボルと決めているミミナグサも入っています。たくさんの方の読者をアポイ銀河がまたたいています。イラストに負けない通信になるように努力したいと思います。

これからもご愛読よろしくお願ひします。真樹子さん、ありがとう！

十勝の三段山で雪上訓練に初めて参加

11月20日～21日、日本山岳会の雪上訓練が行われました。函館や帯広、札幌など各地から19人が参加して、三段山斜面付近でのアイゼンワークやピッケルワーク、ザイルでの三点確保しながらの下山のしかたなどを学びました。



頂上直下の崖を懸垂下降中のみな子 撮影：鈴木貞信さん

20日は素晴らしい天気恵まれ、今年初の山スキーで、噴火口近くまで歩き、スキーをデポ。アイゼンをつけての歩行訓練と滑落停止の訓練をしました。私は初めて履くアイゼンがちょっと怖かったです。ピッケルを使つての滑落訓練には全員が果敢に挑戦しました。時間を忘れてしまうほどでした。スキーで下山後、宿舎のカミホロ荘で入浴、食事後、中村喜吉さんと、長谷川雄助さんによる座学があり、ピッケルの特徴や、アイゼンワーク、スリングの結び方、特にダブルフイッシャーマンズノットの結び方を全員で実習しました。山談義で夜は更けていきました。話は前後しますが、露天風呂から、流れ星がスーと流れたのです。とてもロマンチックでしたよ。

21日、曇り。安政河口まで山スキーで登高。天気の回復も見込めないためカミホロカメトック山コースはやめて全員で三段山に登ることにしました。

2箇所、ザイルで下降するガレ場が最大の難所。体力はなんとか大丈夫でしたが、緊張で、心臓のバクバクという音が聞こえるほど怖かったです。アイゼンでの登り、くだりも技術が必要でした。体がつんのめりそうで、足を雪面と平行にできないのです。ゆっくり、慎重に歩を進めると、かえってずぼっと雪に埋まることも知りました。

山を眺めるゆとりはありませんでしたが、一瞬、姿を現したハツ手岩が荒々しくそびえたち、夢中でシャッターを切りました。人を寄せ付けないような自然の厳しさを感じました。同時に自然が創り出す美しさも冬山ならばですね。空と雲と山のコントラストに息を呑みました。知らないことばかりで皆さんには大変お世話になりました。山岳会員としての重みを感じています。 (樋口 みな子)

アポイ岳の花たち 未来に向かって

10月9日～10日 シンポジウムと調査登山

10月9日にアポイ岳ファンクラブと様似町教育委員会が主催してアポイ岳シンポジウムが開かれました。地元を中心に40人が参加。



東京から6月まで、環境省の審議官であった小沢典夫さんが講演者として来道。小沢さんは高山植物盗掘防止ネット立ち上げの時の事務局長でした。

小沢さんは、地球温暖化で高山植物に大きな影響を及ぼすと話されました。地球の平均気温は過去100年間で0.6℃上昇。CO2濃度は370ppmあるが、さらに100年後のCO2濃度は540～970ppmになり、地球の気温は1.4～5.8℃上昇すると予測。温暖化が進めば、農業敵地の移動、生態系の変化等、深刻な影響が発生する。地球温暖化を防止するためにCO2の排出削減には化石燃料の消費を減らす対策が必要である。温暖化の影響を受けるアポイの高山植物のためにももっと対策が進むように声をあげ、自分たちの出来るところから実行して行きましようと言われました。

またアポイの花は、様似の宝、その宝を守り育てよう、共同作業で自分たちが楽しみ、よその人たちにも楽しみを分けてやろう、そして少しだけお金も置いていってもらおうとエコツーリズムが広がって欲しいと語り、アポイの花と様似の人たちには共に元気であって欲しいと結びました。

雨竜沼湿原を愛する会の佐々木純一さんは、湿原を守るために町で協力金を昨年200円から500円に値上げしたことで、登山者が激減したと話しました。賛否両論あると思いますが300円位なら出しやすいのではないのでしょうか。登山者も、協力金でなんでもやってもらおうと考えずに山のマナーを守っていつまでも美しい自然を楽しみたいですね。

10日は台風で登山は中止になるかと思いきや、運良くそれてくれたようです。20人でアポイ岳に登りました。ほとんどの花は終わっていましたが、コハマギク、ヒダカミセバヤ、エゾマツムシソウが咲いていました。ムラサキシキブという美しい名の実もみつけました。季節外れのチングルマがポツン、ポツンとあり、今年の異常気象によるもののでしょうか。

馬の背からは、遙かなる日高山脈の神威岳やトヨニ岳を望むことができ思いがけないプレゼントをもらったようで嬉しかったです。
(樋口 みな子)



北海道山小屋フォーラム

一 記念講演「北海道の山と山小屋」
講師 梅沢 俊氏

二 「山小屋の 方を考える」
パネリスト 山崎 昌彦氏

主催 北海道山小屋フォーラム開催実行委員会

山の魅力を伝える山小屋を

山小屋フォーラムに参加しました

10月16日の山小屋フォーラムに参加しました。写真家の梅沢俊さんは道内各地の山小屋を紹介。山の景観を壊さない山小屋への提言が良かったです。海外の山小屋も紹介しながら、花の名山アポイ岳の麓にはビジターセンターがあり、アポイ岳の素晴らしさを伝えるインフォメーションがしっかりしているが、全国から花ファンが集まる夕張岳の山小屋も、そんな役割が果たせる小屋になって欲しいとの発言。私も同感です。

報告は、北海道自然環境課の山田幸喜さんと、山のトイレを考える会の岩村和彦さん、美瑛富士避難小屋について内藤美佐雄さんが報告しました。

山のトイレを考える会の岩村さんの話が、活動が具体的で、論点も整理されていました。山を楽しむために自分たちのフィールドを守りたいと活動を始めたこと、行政まかせにしない、登山者もきちんとマナーを守る、やれることは協力する、既存の山岳会の役割は、登山技術だけではだめ、自然を守るためにはどうすればいいのかも伝えていかなくてはと、意識の変革をと強調しました。

今年、山に登って印象に残ったトイレは、白雲小屋のトイレでした。上川の佐藤文彦さんらが使用頻度を調査していましたが、EM菌でしょうか、散布してあり、嫌な臭いがなく、しかも、ティッシュの持ち帰りが徹底されていて気持が良かったです。登山者のマナーがよくなれば、貯留式のトイレであっても快適に使えることを証明していました。

美瑛富士～十勝岳縦走の時に、望岳台のトイレを使用しましたが、早朝6時だというのにトイレに置かれたゴミ箱はティッシュがあふれて周りにも散乱している状態でした。よっぽど携帯トイレを使用したほうが快適だと思いました。ひとこと、「ティッシュは持ち帰りましょう」のポスターがあればなあと思いました。
(樋口 みな子)

道立文学館で「アイヌ語地名を歩く」山田秀三展

山田秀三氏が北海道各地を訪ね歩いた時のノートや写真、地図などが展示されているほか、聞き取り調査の録音や映像の一部も公開され、地図を片手に訪ね歩いてアイヌの古老から聞き取り調査をした苦労がしのべれます。

アイヌ語の地名は土地の形状に由来し、公開映像でアイヌの古老が「地名を聞いただけでその地が厳しい所か、きれいな優しい所かが分かる。これから先、分からなくなってしまうのが寂しい」と語っています。アイヌ語地名は、意味が分かるように、日本語表記と並列で残してほしいと思います。

アイヌ語地名は無形文化財という山田氏の熱い思いが伝わってきます。

(樋口 みな子)

山田秀三氏が書いた地図



(日高東部)

日高西部 略図

武島川は沙流川と対になっていて、人文的にも沙流川筋に近く、むしろ日高西部のわきといたい処である。

シシムカ

文化講座で北大の工藤正彦先生がイグベラバドの「日本奥地紀行」のお話を聞きました。平取に入って詳しく書いてあると言っているので是非読んでみたいです。平取は私の生まれ所。ピラウトル、アイヌ語の意味は崖の間です。沙流川の対岸は崖線から由来します。ケル(沙流)は水源の意味。エ-カウにでくする前はシシムカと書いてあるそうです。沙流川流域がアイヌ文化の町としてシシムカとアイヌ語表記にはたたりすぎですね。

山のトイレ問題の解決に向けて

山のトイレを考える会 仲俣 善雄

北海道の避難小屋には美瑛富士小屋の様にトイレの無い所もあり、また、トムラウシ南沼などの野営指定地にもトイレがない。百名山ブームで北海道の名山には登山者が大挙して訪れるが、トイレが無いため、ティッシュや糞尿が散乱、見た目も悪いが、自然環境への汚染が危惧されている。

当会は北海道の山のトイレ問題解決を目指し平成12年6月に発足した。登山口でトイレマップやマナーガイドを配布、ゴミやティッシュの回収を行う「全道一斉山のトイレデー」は4回、問題解決に向けたフォーラムを5回開催した。



トイレマップは「登る前に済ませよう」が目的だ。また、少しでもインパクトの軽減になればと携帯トイレの使用も登山者にお願いした。携帯トイレの使用には抵抗感も強く、回収システムの確立が必須であり、普及に向け調査検討していかなければならない。

16年9月5日、絶好の登山日和の中、17名が参加して美瑛富士避難小屋周辺のティッシュやウンコの回収作業を実施した。ウンコを回収して担ぎ下ろすのは初めてである。みなさん、悲鳴を上げながらも何とか楽しんで？回収し、無事担ぎ下ろした

私たちは美瑛富士避難小屋へのトイレ設置を行政に訴えるとともに、登山者には最低限の「トイレマナー」ティッシュ持ち帰り」を広めるなど、問題解決に向け地道で多様な活動を実施していきたい。

(仲俣さんの了解を得て掲載しています)

「アイヌ語地名を歩く」

山田秀三著 北海道新聞社 1650円

北海道立文学館で「アイヌ語地名を歩く」山田秀三展が開かれました。

展示された、書き込みのある地図や、調査後に書いた周辺の絵などから、40年もの間アイヌ語地名に情熱をかけた歩みに打たれました。アイヌ文化を改めて見直す機会になりました。この本は、北海道新聞に昭和59年から2年間連載したエッセイをまとめたものです。



知里真志保氏や金田一京助博士との交流も深かったことや、アイヌの古老たちとは、研究者としてというより友人として付き合ってきたことがわかり、謙虚で温かな人柄が伝わってきます。肩のこらない軽妙な文章と、味のある絵と文字が楽しく、一緒に旅しているような気持になりました。「春楡の茂る札幌」と題するエッセイが心に残りました。アイヌ語名でチ・キサ・ニ（我ら・こする・木）といい春楡の木片をこすって火を作ったところから出た名だという。「大昔、春楡姫が天上から降って、アイヌの国に火を伝えた。後に天から降られた神が、春楡と愛を語り、アイオイナカムイでアイヌに生活文化を教えた創生神であるという。」とアイヌの言い伝えを紹介していて、もっともっと聖樹の茂る札幌であって欲しいと記して

います。とてもロマンあふれるお話ですね。北大のハルニレは、私たちの強い願いで残りましたがもし生きていらしたら一緒に応援して下さったのではないかと嬉しくなりました。

別冊太陽「先住民 アイヌ民族」平凡社 2800円

アイヌ民族の歴史と文化を理解できる豊富な写真とさまざまな分野で活躍するアイヌの方や、研究者の文章で構成された本です。

アイヌは獲物に対する敬意と感謝を忘れず、儀礼を持って接していたこと、言葉の民であったこと、木の工芸品や刺繍や織物など工芸的な技能に優れていたことが作品の素晴らしさで物語っています。

知里幸恵とパチェラー八重子の仕事や生き方にも触れています。姪の知里むつみさんは「未来に伝えたい人—知里幸恵」という題で残された知里幸恵ノートに記されたこんな一節「此の歌は非常に聞いていると優しい美しい感じが致します。この節が私は大好きなのでございます」という表現からフチのそばで楽しみながら書いている姿が目につかび、アイヌ文化を伝える使命感だけではなく、茶目っ気たっぷりの好奇心あふれる人ではなかったかと思っています。アイヌ神謡集は素晴らしい文学ですが、幸恵さんが残した日記や、家族に宛てた手紙から、感受性豊かな人間性が伝わってきます。もっと多くの人にアイヌ文化の素晴らしさを知ってもらいたいと思います。写真が美しいので、そばに置いて刺繍やアイヌ民族の風景などを時々眺めています。



「二人のアキラ、美枝子の山」平塚 晶人 文藝春秋 2095円

美枝子さんは「氷壁」のモデルで槍ヶ岳北鎌尾根で遭難死した松濤明の恋人と言われ、先鋭的なクライミング集団第2次Rccを創設した奥山章の妻となった登山家です。



美枝子さんと著者の往復する手紙から、すでに松濤明の死から30年以上もたっているのに二人のクライマーが生き生きと浮かび上がってきます。とりわけ、松濤明との交流は、山小屋で、山の思い出を語った2回だけだったというのに強烈な印象を美枝子さんに残していました。山仲間の間では、厳しい山に挑戦する激しさや、仲間と協調しないエゴイストと見られていたことが明らかになるのですが、美枝子さんに見せた姿は穏やかでロマンチストな一面だったことに救われる思いがしました。優れた記録者でもありました。遭難死するまで、書きとめていた言葉が胸を打ちます。「我々ガ死ンデ死ガイハ水ニトケ、ヤガテ海ニ入り、魚ヲ肥ヤシ、又人ノ身体ヲ作ル 個人ハカリノ姿 グルグルマワル」と。きっとたくさんの登山者を見つめているのではないのでしょうか。

人との縁も不思議です。山岳雑誌に松濤明の思い出を書いて欲しいと美枝子さんに連絡してきたのが奥山章でした。やがて結婚。30代で、山岳映画の製作者となった奥山と山と共に歩んだ人生が語られます。しかしクライマーとしては、年齢的にエベレストへの夢はかなわず、自死します。45歳でした。その後の人生を、たくましく地に足をつけて生きてきた美枝子さんのなんと清しいことか。二人にはもっと十分に生きて欲しかったと思います。

作家として、精神科医として、教師として、妻として、母として生きた生涯を写真と文章で綴る「アルバム 神谷美恵子」と神谷美恵子語る、加賀乙彦、鶴見俊輔、中村佳子など12人による書きおろしエッセイと神谷美恵子の詩で構成されています。

19歳の時、叔父がハンセン病療養所多摩全生園へ話をしに行く際に、オルガン奏者として同行。初めて見る患者の姿に大きな衝撃を受けるのです。津田塾大学を卒業後、27歳で医学をめざすのです。「何故、私たちでなくてあなたが？あなたは代わって下さったのだ、代わって人としてあらゆるものを奪われ、地獄の責苦を悩みぬいて下さったのだ。」と心と身体を病む人と共にあろうとした神谷美恵子の全体像が立ち上がってきました。

何を考え、生きてきた人なのか知りたくなりました。



「生きがいについて」 神谷美恵子 みすず書房 1500円

神谷美恵子コレクションの第1巻目がこの本です。生きがい論はちまたにたくさんあふれているけれど、ハンセン病患者との深い交流と、精神医学、文学にわたる広い読書歴から考察した論文です。平易なことばで語る生活者としての著者の姿勢に共感しました。

生きがいを感じる心、生きがいを求める心、生きがいをうばい去るもの、新しい生きがいの発見といった項目をたてて体系化しようと試みています。



私も退職してから「社会の役に立っていない」と落ち込むことがたびたびあったのです。

あるとき、家族から「生きがいは銀河通信だよ」と言われて、役にたっているかどうかは分からないけれど、私の一生懸命な姿に映っていることに気づかせてもらったのです。

著者は「本書は病や苦難にみまわれたひとの心の世界という角度から、生きがいに関係した人間性の事実を少しでも探ろうとしたにすぎない、一らい園こそ人間の生きがい一般について示唆するところが多い環境である」と書いています。（ハンセン病についてらいと使用していますが、1966年の初版のままとしています）

恵まれた家庭環境で育ち、語学にも堪能であった著者は、肺結核で療養した体験から、死や生の問題は早くからとらえてはなさなかったと記しています。ハンセン病で苦しむ人たちの心に寄り添いたいという使命感に圧倒されました。自分を買った著者の真摯な生き方は、日々心尽くして生きることの大切さを教えてくれます。私も外にばかり向けるエネルギーを内面をみつめることにしなければと思えた本との出会いでした。

「やんばる生きもの図鑑」沖縄の山原でよく見られる生きものたち

やんばる自然体験活動協議会

沖縄の植物や野鳥や動物が楽しいイラストで一目瞭然です。随所にあるミニエッセイは沖縄を訪ねる時に参考になります。たとえば「森が笑っている」に「やんばるの森を訪ねるなら3月～4月をおすすめします。長尾橋に立つとやんばるの山々のつながりが目の前に広がります。まるでブロッコリーのようなイタジイの森が笑っているようです。」この時期に行ってみたいですね。絶滅危惧種であり、天然記念物のヤンバルクイナにも会いたいなあ。銀河通信の読者である水野隆夫さん（環境省沖縄南部自然保護官）も執筆しています。



購読料をありがとう 2004・10・4～11・10

小笠原実孝（札幌市）	小山健二（札幌市）	小池修生（札幌市）	長谷川雄助（札幌市）
久野真紀子（様似町）	笹島秀則（様似町）	綾音たまき（豊前市）	高橋健（日高町）
下田善彦（札幌市）	高橋桓志（札幌市）	青柳志郎（北広島市）	東加澄（札幌市）

12号分の方、カンパも含めて18,000円は印刷、送料に使わせていただきます。ありがとうございます。

今年最後の通信です。振込み用紙を同封しました。振り込んでいるのに間違っ入っている方もあるかもしれません。その時はお許しください。また、購読しないかたは遠慮なくご連絡ください。来年もよろしくご愛読お願いいたします。

映画

人間としての誇りを伝える

「ピエロの赤い鼻」 フランス ジャン・ベッケル監督

1960年代のフランスの田舎町。小学校教師のジャック（ジャック・ヴィユレ）は日曜ごとに人前で赤い鼻のピエロを演じることを無上の喜びとしています。思春期の息子はそんな父が嫌でたまらない。ジャックの親友アンドレ（アンドレ・デュソリエ）はピエロに扮する訳を語り始めます。

大戦末期にドイツ占領下、若い二人はレジスタンス気取りで、鉄道の爆破事件を起こし、独軍に連行されます。そこに二人の仲間も加わって深いぬかるみの穴の中に閉じ込められ死の恐怖に怯えます。番兵を命じられたひとりの独兵が赤い鼻をつけてピエロを演じ笑わせるのです。自分の身の危険を犯してまで、パンや酒をピエロを演じながら投げ入れるのです。この場面は、アウシュビッツの収容所で極限の状況の中でも良心のある人たちがいたこと、希望を失わなかった体験を書いたフランクルの「夜と霧」を思い出させました。ユーモアと笑いで、希望を持ってと伝えたのでした。立場は違っても、人間としての良心を持つ独兵のユーモアが彼らの生きる支えになったのです。繰り返し流れる「よろこびの歌」が胸にしみました。



ジャックは日曜ごとにピエロにふんして…

生還したジャックたちが苦しみながらも、真実を語る勇気が素敵です。父親に反発していた息子が父の人間としての誇りに気がつくのです。かけがえのない命を精いっぱい生きて欲しいのメッセージと人間への愛と信頼を謳いあげた作品です。普通に暮らす人々が犠牲になる戦争は繰り返さないでと静かに訴えかけていました。

コスタリカの大自然に心洗われました

「天国の青い蝶」 カナダ・イギリス レア・プール監督



青く輝く神秘の蝶、ブルーモルフォを求めてコスタリカに出かける3人の再生の物語。

カメラが大自然の表情と3人の心の動きを捉えていきます。最近、テレビでも紹介された実話の映画化です。

脳腫瘍で、余命数ヶ月と宣告された10歳のビートの夢をかなえようと母テレサが昆虫学者アランに同行を懇願するのです。コスタリカの大自然が素晴らしい。走るアランに背負われて蝶を追うビートが輝いています。動物や昆虫の生命の躍動する映像に、私も森の中に入って探検しているような気持を味わいました。

夢をあきらめなかった少年の勇気が奇跡を生むのです。

青い蝶が生命の神秘のシンボルであったことに気づかされます。自然は病気を治す力もあったのですね。

エカおばあちゃんがすてきです

「やさしい嘘」 フランス・ベルギー ジュリー・ベルトウチェリ監督

グルジアで暮らす女三代家族。エカおばあちゃんと母マリーナ、孫娘のアダ。ソ連崩壊後、独立はしたが民族紛争が続く生活は苦しい。電気も水道もよく止るけれど、家族は支えあって生きています。

エカおばあちゃんの楽しみは、遠いパリで働く息子オタールからの手紙。フランス語で読むのはアダです。大好きなおばあちゃんを大事にしている気持が伝わる場面です。ところが、おばあちゃんが留守のとき、オタールが事故で死んだ知らせが入るのです。マリーナとアダはエカおばあちゃんを悲しませないために、オタールのふりをして手紙を書き続けるのです。電話してこないオタールの様子を知りたいと、エカおばあちゃんは、宝物のフランス語の古書を使い、フランス行きの航空券を3人分手配し、難しいピザも取得するのですが、そこには、息子を案ずる母の顔がありました。盛装して出かけるエカおばあちゃんのなんとすてきなこと！ エカおばあちゃんは息子のアパートを訪ねて、事実を知ってしまうのだけど、マリーナとアダのやさしい嘘に癒されるのでした。得意のフランス語を生かして、パリにとどまり未来を切り開こうとするアダ、目で「頑張りなさい」と無言で送り出すエカおばあちゃん、寂しさをこらえる母マリーナ。それぞれの思いが交差するラストがいい。女性監督らしい、繊細な心の動きを見事に映し出していました。85歳で映画に出演したエカ役（エステル・ゴランタン）が気品と風格がありました。まだまだ先だけど、強くて、可愛いこんなおばあちゃんになれたらいいなと思いました。

新潟中越地震の現場から 岩村 和彦

中越地震から1ヶ月。被災した人々は、どんな思いで冬を迎えようとしているのでしょうか。山仲間のganさんこと岩村和彦さんが、中越地震の災害地にボランティアで行って来ました。

ganさんのレポートです。



9.5山のトイレで美瑛富士避難小屋
周辺でティンツ等の回収作業をする筆者
(写真撮影・仲俣善太郎さん)

11月19日、室蘭港です。もうすぐ直江津行きのフェリーが出港。18時間の船旅です。懐かしい室蘭で、想い出深い飲み屋に立ち寄る。常連だった友達に逢いご馳走になりました。

「懐かしきママの年齢知らずとも呑み明かしたる時は忘れじ」

11月20日、佐渡の横通過中、べた風の日本海 退屈する暇もなく後二時間半で直江津着。ジョグしないで食べて呑んで体重増えたかな。重たいザック背負って直江津駅

まで歩くのが今日の鍛練。川口町には何時に着くやら。最悪何処かでピバーク山屋やの特技だわ。今夜から明日の川口町の予報が気になる。雨中でのテント設営も、山中だと思えば屁みたいなものか。

「べた風のフェリー進むや佐渡沖を二日ばかりの微力を積みて」

昨夜は結局長岡駅の軒先借りて仮眠。隣が交番。寒さも感じずまあまあ眠れました。

6時5分の代替バスで川口へ向かいます 雨は止んだが曇り空 さてお湯沸かして朝飯準備。

11月21日、雨上がり晴れた川口町 数百人のボランティア集合。今マイクロで和南津(わなつ)地区へ移動中。力仕事部隊に応募、建物半壊地割れあちこちに。

「柿の木や和南津に根を張り幾星霜あゆ揺れ耐えし姿涙す」

7人家族の関さん宅の瓦とガラスの片付けで一日終わる。おばあちゃん柿を次々むいては食べな食べな。千葉の青年と宮城の中学生の相棒も良く働く。家一軒づつ危険度示す色紙が。明日早朝は町中をジョグして見て回ろう。

「頭垂れし老婆差し出し甘柿に我が身の甘き暮らしを恥じて」

夕方、河川敷き設置の九州自衛隊の風呂に入る。なかなか快適。

ボランティア本部裏のテントで、地酒の長者盛で明日の英気養い中。即席の麻婆春雨とカレーライスが美味しいなあ。ローソク二本があるだけで至福の夜を迎えてる。時折小雨でも、やはりテントが落ち着くのは山屋の性か。

「魚野川即席風呂の隊員の里の火の国小雨に煙るや」

活動二日目。夜中に断続的に雨。朝6時から町中をジョグ。駅前通りの商店、寿司屋も無惨な姿。墓の九割は倒壊。あちこちのテント村で朝飯の準備。ボランティアに若い人の多いのが嬉しい。私は年寄り組だ。さて今日も頑張ろう。

「それぞれに汗流したる川口の若き瞳に教えられたり」

田麦山地区に来ました。川口町でも最大の被害です。全壊が九割。小学校には沢山の避難民がいます。障子張り、家具下ろし、がれきの撤去で予定時間終了。目の前では仮設住宅が建設中。僅か二日間の被災地訪問でしたが、訪問した家で大変感謝されたのを素直に喜んでいきます。さて今夜は何処に泊まるかな。多分、新潟駅でおはこのピバークか。

「のどかりし田園暮れて主のなき家の灯りやいつぞ燈るや」

小樽へ向かうフェリーの中です。

「避難所の暮らし続きし田麦山離れし明日はネクタイ絞めて」

「越後路のふらり暖簾をかき分けて店主の頭リーゼントの匂い」

「中越を去りて日常戻りつつ老婆柿の木瓦礫は巡る」

「海に行く北に拉致され同胞が何を想いて祝日に生き」

「明日もまたいつものように陽は昇り配給食の朝が始まる」

小樽からの始発電車です。また今日から日常に戻ります。

「始発にてカップ麺食べし旅人に無関心装う通勤人よ」

(今年は毎週、日高の沢にどっぷりはまっていたganさんです。某放送局に勤務してます。山メーリングリストに送ってきたメールですが、ご本人の了解を得て掲載しました。)

お便り

■銀河通信ありがとうございます。手書きが入るとやはり味がでますね。10月14日、武道館でジョンの記念コンサートがあり、yokoに会いました本「アイヌ神謡集への道」を持ってもらって写真をとったので同封します。(札幌市・小野有五さん)

■8月末に水俣で「不知火」の公演があり、私は東京、熊本に次ぐまさに三度目の「不知火」でここでやらなきゃ意味がないと思っていた者だから、本当によやく体感できたという気がしました。しかし、ここで終わりではない、ここからまた見直さないと感があります。偶然、図書館で手にしていたアン・マクドナルド著、カナダの水銀公害を少しずつ読んでいたので銀河通信を読んでびっくり。アンさんが写ってましたもの。(豊前市・Aさん)

■いつも楽しみに銀河通信を読みます。内容充実していて書くのが大変でしょうね。高山植物パトロールと一緒にしたいですね。大雪の雄大さを沖縄にいと一そう、懐かしいです。

私の企画、発案で私のパースデーに凶鑑を発行しました。一口メモも私。コノハチョウの分布は八重山にもいます。(浦添市・水野隆夫さん)

■吉田ルイ子さんの写真集は千軒岳に最初に登った時、千軒の歴史を調べており福島町に資料を頼んだ時に手に入れた大変高価で貴重な本でした。それから、吉田ルイ子さんのニューヨークハーレムの写真集など手にするようになっていました。知っていれば、参加してみたかったなと残念に思ったことでした。(札幌市・Yさん)

■強風と雲中の9月2日。ズルズルとした火山灰が、歩くのを難儀にさせる杓形と鴛泊登山道の合流地点直下に、現地の土砂を充填した土嚢50個を階段状に設置しました。足場の確保と侵食の軽減を目的とした試験的な登山道補修を環境省の調査事業を基本に宗谷支庁・利尻町、そして有志の方々で行ったものでした。もちろん、十分なものではありませんが、このまま放置すれば、人が歩くことも出来なくなるばかりか、利尻山の高山帯に生息する植物すら、生きる場を失ってしまうのです。しいては利尻山固有種のリシリヒナゲシが絶滅の危機に瀕してしまうかもしれません。一彼岸入りをした朝、仰ぎ見る利尻山の紅葉は麓へと下り、ひとときでも傷を癒すことのできる季節が来たことに安堵しました。

(リシリ博物誌から利尻町・小杉和樹さん)

■美瑛岳にいらしたんですね。苦小牧時代の40年前の靴まだ持っています。膝の手術をしてパドミントンも山のストップ。王子争議を語りつぐ会を持ちました。(美瑛町・Kさん)

■色々な幸恵さんの「銀のしずく」の記事、イヤイ・ライ・ケレ(どうもありがとうございます)(平取町・山道康子さん)

■紀久代さんの絵画展、ご覧いただきありがとうございます。私は1981年よりヒマラヤ登山で通いましたが、今ではハイキングです。83年に子どもたちの学校を休ませて家族でヒマラヤトレッキングに出かけ、以後女房が毎年のように一人でヒマラヤ通いをしております。(札幌市・小山健二さん)



河村健二の版画

芸術に親しむ

登山を樂む一方で絵画や写真音楽などさまざまな分野でも活躍している、3方に50歳います。小山健二さんの水彩画展は4バートで暮らす人と自然を描いています。そのとも素朴な人柄が伝わります。でも高山植物の破壊もすこぶ勢いで進んでいると聞きました。河村健二は版画、フジノアサト山崎の夜明けの暁の青い空にです。小山健二は動物省山岳会。河村健二はエフエフエフの会。会員です。

札幌資料館ギャラリーでの小山紀久代さんの水彩画展で9.5ご本人と



「自由の天地」の原風景に集う

幸恵を世界中に発信

フォトジャーナリスト吉田ルイ子氏が講演



知里幸恵

樋口みな子

九月十八日、『アイヌ神謡集』を一冊残して十九歳で亡くなった知里幸恵（1903年〜1922年）から学ぼうと、幸恵さんの出生地・登別市でフォーラムが開かれました。主催は知里森舎（横山むつみ代表）です。

午前中は、幸恵さんの生まれ育った川や、山を訪ねるアイヌ語地名フィールド



知里幸恵の墓前で、左から、吉田ルイ子、横山むつみ、筆者、小野有五の各氏

9月18日、登別市で

ワーク。五十人で散策し、さんの墓参りもしました。金城マツさんと、知里幸恵 東京にいた頃、幸恵さん

知里幸恵フォーラムin登別

るかのようでした。

は登別を懐かしむ日記や手紙をたくさん残しています。そのひとつが、ヨカチベ（岡志別 川）でした。「私の耳に響いてくる音律はヨカチベ川のサラサラサラサラとのこりくる……」の詩そのままにヨカチベ川はあり、幸恵さんの望郷の思いに胸が熱くなりまし

た。今は姪の横山むつみさん夫婦が暮らす、幸恵さんの生地は、栗や、カラマツの大木がどっしりと根を下ろしていました。今回の台風で数本のカラマツが倒れ、風速五十メートルの恐ろしさを感じても思い知らされました。幸恵さんが遊んだ栗の木が今も元気に育っていて、私たちを見守つてい

るかのようでした。午後からは、フォトジャーナリスト吉田ルイ子さんの講演、吉田さんと北大教授の小野有五さんとの対談があり、登別市民だけでなく、東京、京都、千歳、旭川、白老、札幌など各地から二百人が集いました。横山むつみさんが、『アイヌ神謡集』の序文を朗読して講演に入りました。

吉田ルイ子さんは室蘭の出身。「大正の時代、マイノリティーである幸恵さんの生き方が、私自身の生き方にもつながる」と語りはじめ、小学生の頃、心やさしいアイヌの少年がルイ子さんにスズランを摘んでくれたエピソードを紹介。アイヌ、アイヌと、いじめにあっていたこと、アイヌの人たち家族の温かさが忘れられない原体験だと語りました。幸恵さんの業績は、金田一京助氏の影に隠れがちだが、もつと評価されていくはず、「私はアイヌだ、ど

こまでもアイヌだ、同じ人間ではないか、私はアイヌであったことを喜ぶ」と日記に残した幸恵さんの生き方を、日本だけでなく世界中に発信すべきだと語り、「幸恵さんのエコロジカルな見方を物質文明を見直す原点として紹介して行きたい」「知里幸恵をアメリカ、オーストラリア、シベリアなど世界のマイノリティーに発信したい」と結びました。

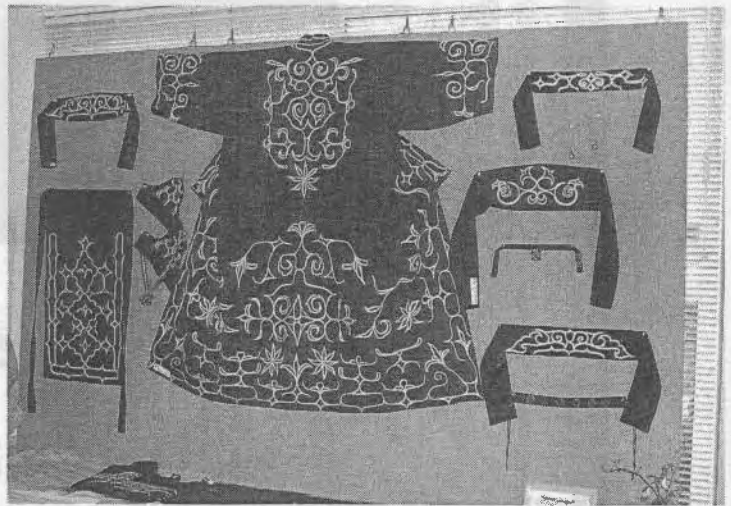


小野有五さんとの対談では、写真始めたきっかけや、どんな写真を撮ってきたかが語られました。水俣病を告発した写真家のユージン・スミスの、生命の誕生の瞬間を捉えた一枚の写真のとりこになって、フォトジャーナリストの道を歩むことになったこと、写真を撮るとき、最も大切にすることは被写体との心のコミユニケーションであること、撮られる人がいい写真だなと思う写真を撮りたい

千歳でアイヌ刺繍の作品展

自然との暮らしから 生まれた美しい文様

文様それぞれに深い意味



砂澤代恵子さんの作品＝千歳市の喫茶店「北のほたる」で

アイヌ刺繍の作品展が、千歳市の喫茶店「北のほたる」で開かれ、アイヌ民族伝承会らぶらん工房を主宰する砂澤代恵子さん親子やアイヌ刺繍を学んだ生徒の作品が10月16日から30日まで展示されました。

「らぶらん」とはアイヌ語で「羽が空から降る様子」を表すことば。代恵子さんの祖母である砂澤クラさんが伝承していたラップランコタン(羽の降る国)からつけられました。クラさんはユーカラの記録や、詳細な生活記録を書き続けたアイヌ文化伝承者で、著書に「ク スクツプ オルシベー 私の一代の記」があり

ます。アイヌの伝統的な刺繍も引き継ぎ、数多くの作品を残しました。会場には1500年前に作られた貴重なアイヌ刺繍や、クラさんが製作した民族衣服も展示されていました。代恵子さんはクラさんに育てられ、クラさんが亡くなるまで生活を共にして伝統的な刺繍を受け継いできた

方です。アイヌ刺繍は3つの文様が基本で、ひもをつなぎあわせたようなウォッキキリは「子孫が繁栄するように」、星のようなシカイは「コタンが争いごとなく仲良く治まるように」、うずまきのようなモレウには「家族が仲良く、健康で暮らせるように」という意味が込められているそうです。代恵子さんは「自然との暮らしの中から生まれた美しい文様を見ていただき、素晴らしいアイヌ文化や、アイヌ民族について知ってもらいたい」と語ります。



右から代恵子さん、クラさん、代恵子さんの娘、嘉代さんと由美子さん

一針一針、丁寧に作られた作品から、温かいぬくもりと優しさが伝わってきました。客がコーヒーを飲みながら作品のひとつひとつを静かに味わう姿が印象的でした。(樋口みな子・フリーライター)

あとがき

今年も残すところ一明にになりました。台風や地震など災害の多い年でした。新潟中越地震で被害にあわれた方には住心室がゆくゆくと心細い毎日かと心細く思います。せめて日曜日を越えることを祈ります。私はこの一年風邪も引かず元気な過世感謝しています。今年最後の通信になりました。少し早いですが皆様も良い年を！新しい年が平和でありますようにと願っています。 (み)

9条の会札幌講演会

11月25日に「9条の会」の講演会に行きました。奥平康弘氏は「現実という言葉に負けないで憲法をどう生かすのか」という問いに答えて、小田実氏は「わが国の民主主義は平和主義と結びついている。この平和憲法は日本だけでなくアジアと世界のたゆまぬ闘いの結果として生まれた。今、アメリカは全体主義に変ろうとしており、日本はアメリカの腹の中にいるけれど、たゆまぬ闘いの中で憲法を守りたい」と語りました。鶴見氏は「軍事が大きく持てよこされる」と話した。会場はロビーまで人があふれ、4000人で超満員。憲法を守るための熱意と元気が出ました。